

ふる事はやり、地女等も是を學べり、今は田舎娘も、鬘結に縮緬を用ふるなり、

〔嬉遊笑覽九娼妓〕今藝者と云ふ女は昔の舞子の名殘なり、又はをり藝者とは、深川のげいまやより云ふ、明和七年の冊子辰巳園藝者を喚むと云ふ處、はをりに去ましやうかといへり、もと女共はをりを著たる故なり、豊後節はやりて此風起れり、下手談義、ぶんごかたりのことをいふ處、あまつさへ女があられもないはをりを著て、脇差まで差た奴も、折ふし見ゆるぞかし、昔は堀の舟宿の女房ばかりぞ羽をりをきける、今は大てい小家の一軒も持たる宿の子も、女のあるまじき羽織きせたる親の心おしはかりぬ、みな是愚人のするわざぞや、昔女郎にも男に作り明和二年川柳點、おめかけもうきふしんこを近所の出その頃橘町に女藝者多くありし故なり、

〔皇都午睡三編中〕深川仲丁は女郎より藝者上方の遊びをおもとする所にて、藝者の置屋を見番と云ひ、子供藝者を羽織と云ふ、是は三人を一組として藝者一人料なり、羽織とは腰より下は賣らぬといふ謎なりとぞ、地前にて出るをデヘシと云、仕替に出すを倉がべと云て、幫間を男藝者、町牽頭を野大根と云ふ、

〔寛天見聞記〕また三味線藝者と云ありて、深川仲町芝高輪は云に及ばず、三丁町、兩國藥研堀、柳ばし、本町石町の新道、淺草仲町、下谷廣小路、湯島天神の邊、芝神明前、其外處々に住居して、あやしき風俗に裝たる女、招きに應じて酒席に出て酌を取り、流行歌とて好色なる事を、三味線に合せてうたひ、若き人々をたぶらかす、略中

ころんだらくはふくくと付て行藝者の母のおくり狼略

此歌にて考ふべし、獸に比せしむむべなり、

〔賤のをだ卷〕女藝者流行て、江戸端々遊所は申に不及、並の所にてても藝者の二人三人なき町はなし、餘りつものりて吉原品川の賣女の妨になるにより、賣女屋より訴へて、高繩邊の女藝者十三三